



津門大箇町遺跡

西宮市

津門大箇町遺跡

—2号電線共同溝事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



兵庫県文化財調査報告
第435冊

兵庫県教育委員会



平成25(2013)年2月
兵庫県教育委員会

西 宮 市

津門大箇町遺跡

－ 2 号電線共同溝事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 25 (2013) 年 2 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　言

- 1 本書は西宮市津門大箇町に所在する津門大箇町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は2号電線共同溝事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、平成16年度と平成18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査を実施し、平成24年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター（埋蔵文化財調査部）が出土品整理作業を実施した。
- 3 調査の推移
 - (発掘作業) 工事立会　平成16年9月1日～12月3日
実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
 - 工事立会　平成18年6月6日～14日
実施機関：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
 - (出土品整理作業)　平成24年8月1日～平成25年2月28日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 遺物写真撮影は、株式会社タニグチ フォトに委託して行った。
- 5 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 中川渉が担当した。
- 6 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 7 調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
西宮市教育委員会、合田茂伸、西川卓志、森下真企、福庭万里子、坂江渉（順不同）

凡　例

- 1 使用地図
本書に使用した地図は下記の通りである。
 - 第1図 国土地理院1／25,000地形図「西宮」「大阪西北部」
 - 第2図 大日本帝国陸地測量部1／20,000地形図「西宮町」「今津村」明治18年測量
 - 第3図 西宮市1／2,500図「津門」平成20年修正
- 2 遺構の略号
遺構の略号は、土坑が「SK」、溝が「SD」、柱穴が「P」とする。
- 3 遺物の番号・種別
掲載した遺物の種類には土器・石器があり、報告Noは共通して1～の通し番号としている。
土器の種別の違いは実測断面の色を、須恵器については黒ベタ、土師器・弦文土器は白抜きで表示することによって区別する。
- 4 その他
今回の調査では公共の基準点・水準点を用いた詳細な記録を作成しなかった。そこで平面図には工事図面から反映させた方位を付しているが、誤差を含む。また水準高は、各地点の現地表面を仮の基準レベルとして、そこからの深さを示したもので、調査地点間で共通する高さではない。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の位置	1
2 歴史的環境	1
第2章 調査の経過	
1 調査の経過と方法	4
2 従前の調査	5
第3章 平成16年度の調査成果	
1 H16-1 地点	7
2 H16-2 地点	9
3 H16-3 地点	9
4 H16-4 地点	10
5 H16-5 地点	10
6 H16-6 地点	15
7 H16-7 地点	15
8 H16-8 地点	18
9 H16-9 地点	18
10 H16-10 地点	21
11 H16-11・12 地点	21
12 H16-13 地点	22
第4章 まとめ	
1 基本的層位の観察	25
2 遺物について	26
3 遺構について	26
4 結語	27

挿図目次

第1図 周辺のおもな遺跡 (1:25,000)	2
第2図 武庫川右岸の旧地形図と遺跡の位置	3
第3図 調査位置図	4
第4図 調査地点の位置	6
第5図 H16-1 地点北壁断面模式図 (1:20)	7
第6図 H16-2 地点北壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	8
第7図 H16-3 地点北壁断面模式図 (1:20)	10
第8図 H16-4 地点北壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	11
第9図 H16-5 地点北壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	12
第10図 H16-6 地点北壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	14
第11図 H16-7 地点北壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	16
第12図 H16-8 地点北壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	17
第13図 H16-9 地点北壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	19
第14図 H16-10 地点西壁断面模式図 (1:20)、平面図 (1:50)	20
第15図 H16-11・12 地点北壁断面模式図 (1:20)	21
第16図 H16-13 地点北壁断面模式図 (1:20)	22
第17図 出土遺物実測図 (1)	23

第18図 出土遺物実測図（2）	24
第19図 平成16年度調査区柱状断面図（縦1：40）	25

写 真 目 次

写真1-1 北壁断面	7	写真7-1 作業状況	15
写真2-1 北壁断面	8	写真7-2 北壁断面	16
写真2-2 遺構検出状況（南から）	8	写真7-3 遺構検出状況（北から）	16
写真2-3 遺物出土状況	8	写真7-4 遺物出土状況	16
写真3-1 作業状況	9	写真7-5 S K1断面	16
写真3-2 北壁断面	10	写真8-1 北壁断面	17
写真4-1 北壁断面	11	写真8-2 燃土1検出状況（南西から）	17
写真4-2 遺構検出状況（東から）	11	写真8-3 燃土2検出状況（南から）	17
写真5-1 北壁断面	12	写真9-1 作業状況	18
写真5-2 遺構検出状況（南から）	12	写真9-2 北壁断面	19
写真5-3 遺物出土状況	12	写真9-3 西半部遺構検出状況（南から）	19
写真5-4 S D1断面	12	写真9-4 東半部遺構検出状況（西から）	19
写真5-5 挖削状況	13	写真10-1 西壁断面	20
写真5-6 精査状況	13	写真10-2 遺構検出状況（東から）	20
写真6-1 北壁断面	14	写真10-3 遺物出土状況	20
写真6-2 遺構検出状況（東から）	14	写真11-1 11地点全景、北壁断面	21
写真6-3 断面整形作業	14	写真12-1 12地点北壁断面	21
写真6-4 遺物検出作業	14	写真13-1 北壁断面	22

写 真 図 版 目 次

写真図版1 遺物（1）	写真図版4 遺物（4）
写真図版2 遺物（2）	写真図版5 遺物（5）
写真図版3 遺物（3）	

第1章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

遺跡が所在する西宮市津門大箇町は、市域南部の市街地に位置し、現海岸線からは約2km内陸の距離にある。当該地は国道2号と阪急電鉄今津線が交差する地点の南東側一帯にあたり、さらに東側は名神高速道路の高架に達られる(第1・3図)。このような現況からは本来の地形はうかがうべくもないが、明治18年の測量図によると、南東側の大箇集落と、南西約500mにある津門集落の間は、一面の水田もしくは畑地であったことがわかる(第2図)。

第2図をもとに市域南部の地形を大きく見ると、武庫川と仁川の合流点付近から夙川河口に向かって沖積平野が三角形に広がることがわかる。さらに注意すると、武庫川右岸の樋口新田あたりから高木集落・津門集落を経て東川にいたる旧流路の存在に気付く。現在その流れを踏襲する津門川沿いには、津門大箇町遺跡を含めて有力な遺跡がいくつも存在し、流域の中心の1つを形成していた。

今回の調査箇所は、大箇集落と津門川の間に位置し、今津集落付近に想定されるかつての海岸砂堆との間には、いく筋かの旧河道・微高地・後背湿地をはさんで1km近い隔たりがある。現在の地盤高は4.0～4.1m T.P.であるが、開発が及んでいない明治42年の測量図ではやや南側に25m等高線が通っており、市街化によって1m以上のかさ上げがなされたことが読み取れる。

2 歴史的環境

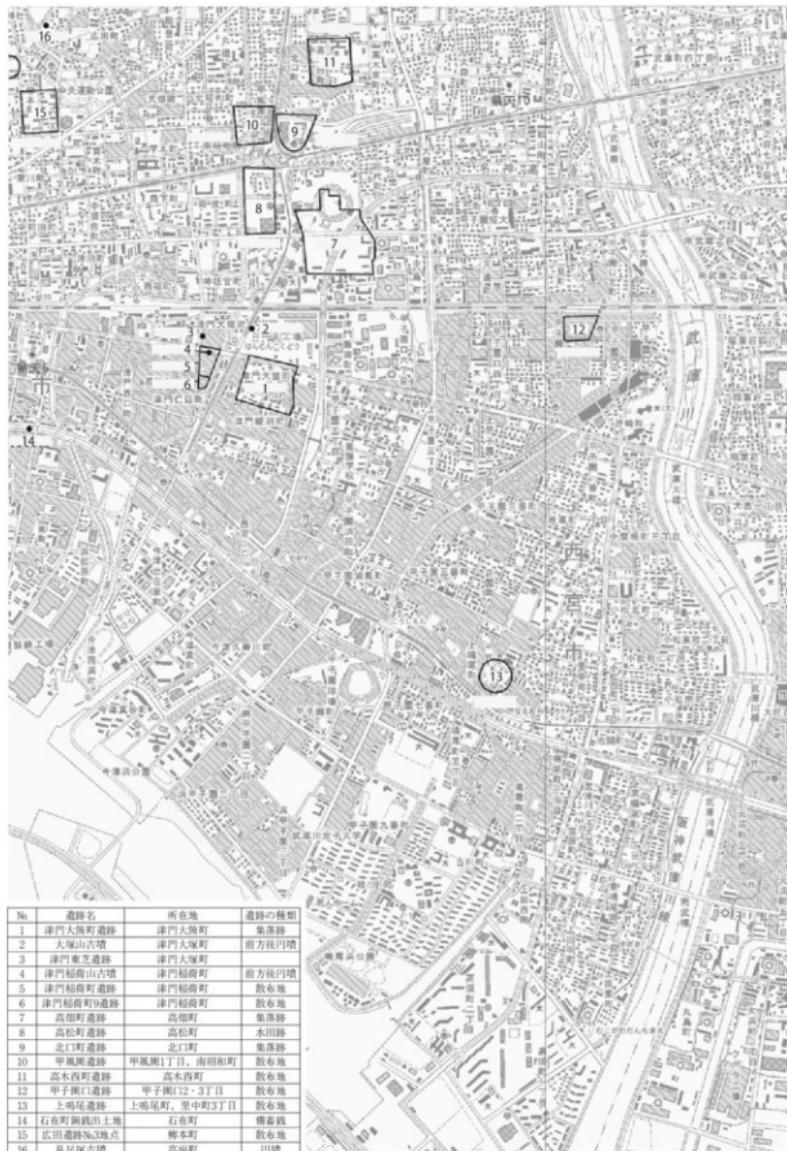
津門にはかつて、大塚山古墳・津門稻荷山古墳という2基の前方後円墳が存在していた。両者とも現在は消滅しているが、津門稻荷山遺跡で出土した津門稻荷山古墳のものとみられる5世紀代の埴輪は、津門大箇町遺跡の時期とも符合しており注目される。また津門では明治13年に扁平錐式銅鐸が出土しており、弥生時代から流域の拠点の1つであったと考えられる。

津門から北へ約1.5kmの高木集落にかけては、比較的規模の大きい遺跡の調査が進んでいる。高畠町遺跡は、復興住宅および阪急西宮ガーデンズの建設に伴って5次にわたる調査が行われ、弥生時代後期・古墳時代前期・中期・後期、奈良時代、平安時代～鎌倉時代の長期にわたって集落が営まれたことが判明している。特に奈良時代の井戸から出土した荷札木簡、肅卑、和同開珎は、これまで不明であった官衙に関する情報を提示した。高松町遺跡は、兵庫県立芸術文化センターの建設に先立って調査され、約1万m²の範囲にわたる弥生時代の水田跡を検出した。北口町遺跡は、アクタ西宮建設に伴う調査で、弥生時代前期・後期・古墳時代前期・中期・後期、平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物が出土した。多くの時期で高畠町遺跡と存続期間が重複しており、関連性がうかがえる。また弥生時代前期の3条の大型の溝からは、前期新段階の土器がまとまって出土した。この時期についてはこれまで、西隣の甲風園遺跡で断片的に知られていたのみだったが、ここで初めて具体的な遺構に伴う資料が得られた。

以上の遺跡は主に、阪神淡路大震災後の西宮北口駅周辺の再開発に伴って発見されたもので、調査の機会があれば、市街地の地下に眠る埋蔵文化財が目の目を見ることができるということが示された。

参考文献

- 高橋学 1985「古環境と災害」「ひょうご考古」創刊号 水庫考古研究会
- 合田茂伸 2002「位置と環境」「津門稻荷町遺跡発掘調査報告書」(西宮市文化財資料第46号) 西宮市教育委員会
- 高畠町遺跡第5次発掘調査団 2008「高畠町遺跡発掘調査報告書」
- 兵庫県教育委員会 2000「高畠町遺跡(Ⅲ)」(兵庫県文化財調査報告第195冊)
- 兵庫県教育委員会 2001「高松町遺跡」(兵庫県文化財調査報告第213冊)
- 兵庫県教育委員会 2002「北口町遺跡」(兵庫県文化財調査報告第228冊)



第1図 周辺のおもな遺跡 (1 : 25,000)



第2章 調査の経過

1 調査の経過と方法

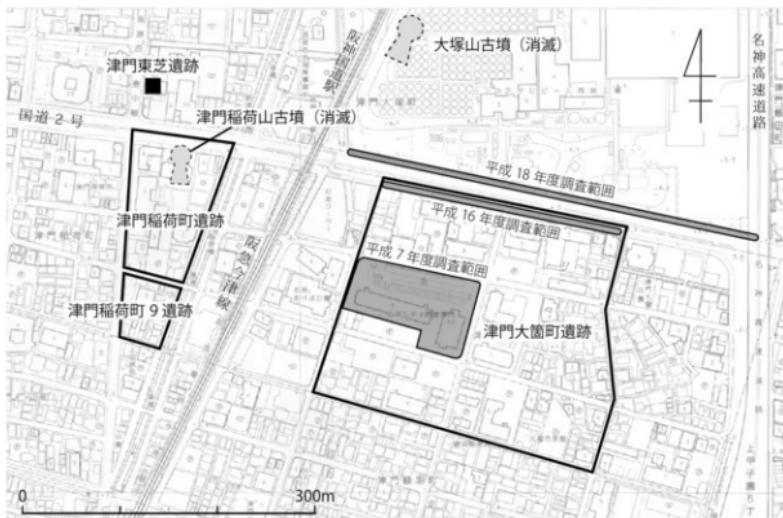
2号電線共同溝事業は、一般国道2号の歩道部分に電線等を埋設する事業で、尼崎市～西宮市域にかけての区間で順次工事が進められた。その区間のうち、西宮市津門大簡町地先には、周知の埋蔵文化財包蔵地「津門大簡町遺跡（兵庫県遺跡図番号050092）」が存在することから、国土交通省近畿地方整備局・兵庫国道事務所より提出された調査依頼（平成16年7月8日付・国近整兵共第31号、平成18年5月26日付・国近整兵共第35-1号）に基づき、兵庫県教育委員会が調査を実施した。

平成 16 年度の調査（遺跡調査番号 2004206）

津門大篠町遺跡にかかる施工の範囲は、阪急今津線阪神国道駅東側の延長約250mの区間で、国道下り線側（南側）の歩道部分において調査を実施した。調査対象としたのは、既掘部分以外に深い掘削を伴うブレキヤストの設置箇所である。調査は工事の進捗に合わせて断続的に行い、平成16年9月1日～12月3日の期間中、延べ11日間で、計13箇所、面積69m²の調査を実施した。

電線共同溝事業は工事区域が狭小で、かつ交通規制を伴い、掘削・施工・復旧を一連で行わなければならぬという制約があった。通常の発掘調査は困難と考えられたため、工事中に立ち会って状況を判断し、記録を保存することとした。

施工範囲の舗装を撤去後、重機ならびに人力で掘削した。埋蔵文化財の存否は、掘削断面および平面を精査・観察し、遺構・遺物の有無によって判断した。調査の記録は、写真撮影および断面図・平面図の作成などによる。ただし水準高は、現地表面を仮の基準レベルとしたもので、絶対高ではない。また現地で詳細な作図が不可能であったため、掲示した断面図・平面図は、略図的な性格のものである。



第3図 調査位置図

調査の結果、古墳時代を中心とする時期の遺構・遺物が高い密度で包含されていることが判明した。調査の内容については、平成 17 年 1 月 13 日付 教理文第 4087 号によって、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所長宛てに回答した。

担当職員 企画調整班 主査 中川 涉、主査 柏原正民

調査第 2 班 主任 池田征弘

平成 18 年度の調査（遺跡調査番号 2006080）

平成 16 年度の調査によって、埋蔵文化財が良好な状態で遺存していることが明らかとなった。そこで反対車線にあたる国道上り線側（北側）の延長約 430 m の区間についても、遺跡が広がる可能性を考えられたため、歩道部分の工事に立ち会う形での調査を実施した。調査対象としたのは、プレキャスト設置箇所で、平成 18 年 6 月 6 日～14 日の期間中、延べ 6 日間で、計 17 箇所、面積約 100 m² の調査を実施した。

調査の結果、同地点については、既往の土木工事等によって攪乱を被っていることが判明し、遺構・遺物は遺存していないかった。調査の内容は、平成 18 年 7 月 5 日付 教理文第 3206 号によって、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所長宛てに回答した。

担当職員 企画調整班 主査 種定淳介、主査 深江英憲

平成 24 年度の調査（出土品整理・報告書作成業）

出土品の整理作業は平成 24 年度に、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部（兵庫県立考古博物館内）において実施した。実施した内容は、土器・石器の接合補強・実測・拓本・復元・写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷である。

担当職員 副課長 中川 涉（調査担当）、副課長 錦宮正（工程管理担当）

非常勤嘱託員 筑子ふさ恵 柏原美音 萩野麻衣 加藤裕美 吉田優子

2 従前の調査

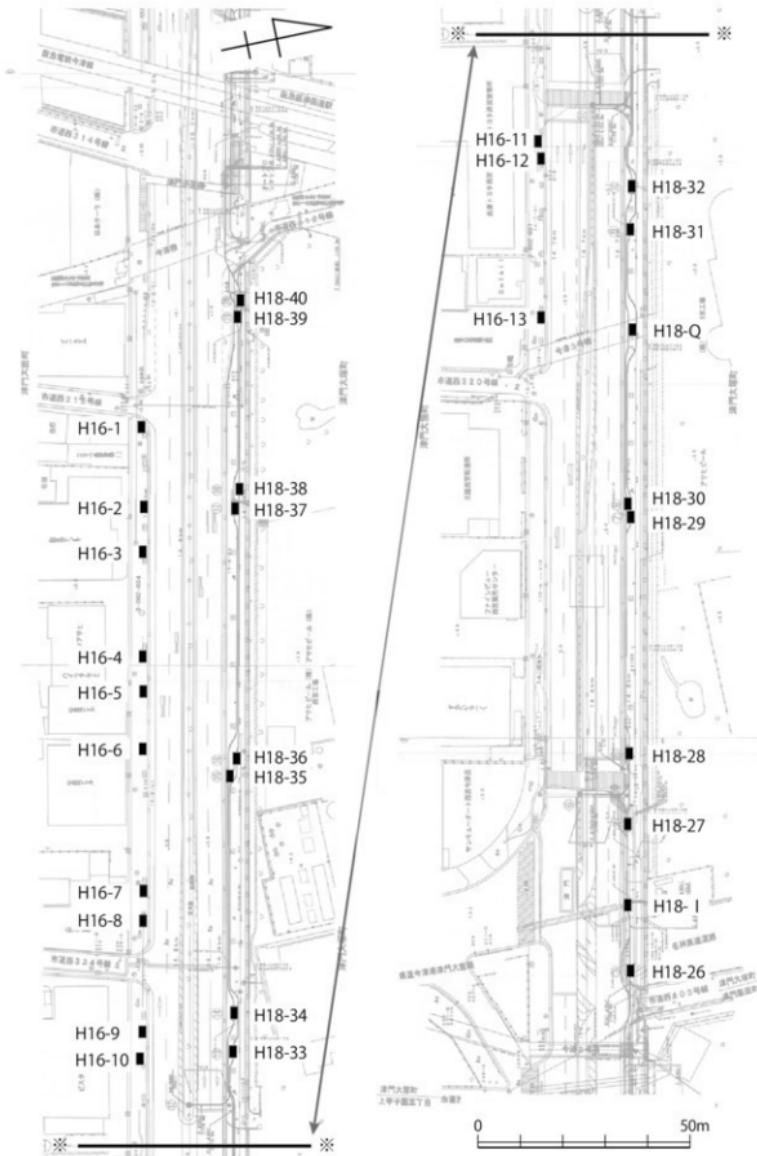
平成 7 年度の調査（遺跡調査番号 950247）

津門大簡町遺跡では、今回の調査地点から 100 m 南の区画において、以前に確認調査された実績がある（第 3 図）。その地点における調査所見は、「遺物包含層は存在するが二次的な堆積と考えられ、遺構も認められなかった」というもので本発掘調査にはいたらなかった。出土品には古墳時代～中世の土器が含まれていて、参考資料として一部を図化した。

1 は 8 世紀代の須恵器杯蓋で、頂部を欠失する。口径は 20.0 cm。2・3 は 7 世紀代の須恵器杯蓋である。2 は頂部につまみをもち、口縁内側のかえりは口縁端部の下まで下がる。3 は頂部を欠失しており、口縁内側のかえりは口縁端部とほぼ同じ面である。2 は口径 8.1 cm、器高 2.25 cm。3 は口径 9.8 cm。

4 は土師質の土鍤である。平面は長さ 6.1 cm、幅 3.05 cm の紡錘形で、2.3 cm の厚みをもつ。両側縁に、縄掛け用の凹みを設けているが、それとは別に、平面の長軸側両端に、溝状のキザミを焼成後に、両面に入れている。現存重量 38 g。

出土品の内容は平成 16 年度の調査成果と一致しており、周辺に供給源となる遺構本体の存在を暗示している。



第4図 調査地点の位置

第3章 平成16年度の調査成果

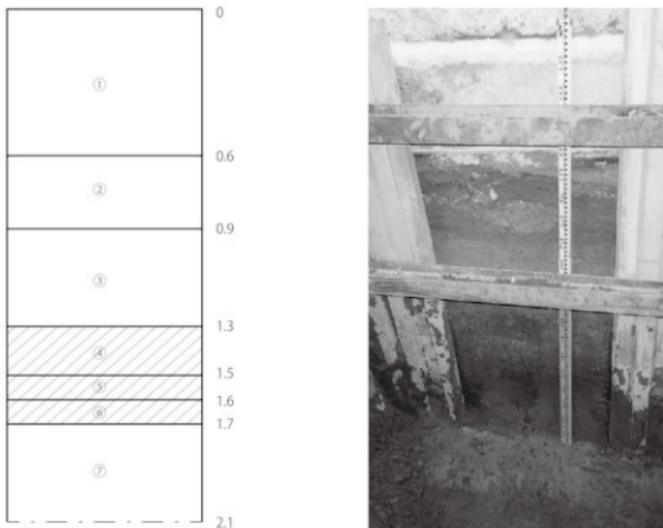
前章で説明した調査経過のうち、遺構・遺物を検出した平成16年度の調査成果について報告する。なお、先述のとおり、水準点・基準点を用いない調査であったため、掲示した断面図は現地表面を仮の基準レベルとした模式断面図であり、平面図は略測図であることを、あらかじめお断りしておく。

13箇所の調査地点の名称は、実施順に「1～13T」として以前に報告したことがある（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2006「津門大篠町遺跡」「平成16年度年報」）。しかし今回の本報告に際しては、西から順に「H16-1～13」と地点番号を振り直して、括弧内に旧トレンチ名を併記しておく。

1 H16-1地点 (旧6T)

市道西315号線との交差点東側角の調査区で、16年度の調査対象範囲の西端に位置する。現地表面から深さ2.1mまで掘り下げた。地表下0.6mまでは舗装・盛土層などの現代層（①層）である。以下0.9mまでは暗褐色躍混じり細砂と茶褐色細砂の互層（②層）、1.3mまでは洪水性の細砂～粗砂層（③層）、1.5mまでは土壤化の強い暗灰色シルト質細砂層（④層）、1.6mまでは土壤化の強い暗灰色中砂質シルト層（⑤層）、1.7mまでは土壤化の強い暗灰色砂質シルト層（⑥層）、1.7m以下は灰色砂層（⑦層）となる。④～⑥層からは古墳時代の須恵器・土師器が多数出土した。

⑦層上面で精査したが、調査範囲内で遺構は検出できなかった。しかし遺物の出土状況からみて、周辺に同時期の遺構が存在する可能性が高い。



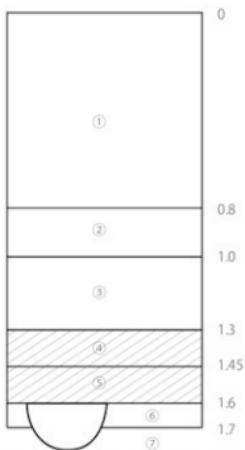
第5図 H16-1 地点北壁断面模式図 (1:20)

写真1-1 北壁断面

出土遺物には須恵器壺・甕、土師器壺・甕・イイダコ壺、ウマの歯（40）があり、3点を図化・掲載した。3点のうち、6は包含層（④～⑥層）の上層、5・7は下層からの出土である。

5は須恵器甕で、短く開いた口縁端部を四角く肥厚させる。口径 18.1cm。

6は小型の土師器甕で、底部を欠失する。丸味を帯びた体部から、口縁部が弱く外反する。外面は縦方向のハケメで仕上げる。口径 9.5cm。7は土師器甕で全形を復元できる。球形の体部から、直線的な口縁部が短く開き、端部は平たく收まる。外面は縦から斜め方向のハケメで仕上げる。口径 10.2cm、器高 13.4cm。



第6図 H16-2 地点北壁断面模式図（1:20）



写真 2-1 北壁断面



写真 2-2 遺構検出状況（南から）



H16-2 地点平面図（1:50）



写真 2-3 遺物出土状況

2 H16-2 地点 (旧9T)

服部モーター前の調査区で、調査対象範囲の西端に近い。現地表面から深さ1.7mまで掘り下げた。地表下0.8mまでは舗装・盛土層などの現代層(①層)である。以下1.0mまでは旧表土層(②層)、1.3mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.45mまでは土壤化の強い褐灰色シルト質細砂層(④層)、1.6mまでは土壤化の強い暗褐色シルト質細砂層(⑤層)、1.7mまでは灰褐色シルト質細砂層(⑥層)、1.7m以下はしまりの良い黄灰色細砂層(⑦層)となる。④・⑤層からは古墳時代の須恵器・土師器が多数出土した。

⑦層上面で土坑1基と柱穴2基を検出した。断面観察の結果、遺構の掘り込み面は⑥層上面からになるとみられる。土坑は北壁に半分かっており、直径60cm、深さ20cmの円形である。遺構検出面の東側2/3はグライ化して還元色を呈しており、南東側に低湿地の存在が予想され、南壁沿いは浅く落ち込んでいた。その落ち込みからは弥生土器の破片が10点ほど出土している。

出土遺物には須恵器杯・高杯・壺・甕・提瓶、弥生土器があり、3点を図化・掲載した。3点のうち、8は包含層(④～⑤層)、9・10は南壁沿いの落ち込みからの出土である。

8は須恵器高杯で、杯部の大半を欠失する。脚部はハの字形に開く低脚のタイプで、円形の透かしを3箇所に穿つ。底径8.4cm。

9・10は弥生土器の壺あるいは甕の体部の破片で、特徴的な突帯をもつ部分2点を図化した。落ち込みから出土した破片は、橙色で粗い砂粒を多く含む胎土が共通しており、すべて同一個体の可能性もある。9は頭部の破片とみられ、屈曲の変換点付近に、幅1cmの突帯を貼り付け、斜め方向のキザミメを入れて紐状に仕上げる。細片のため不確かながら、突帯部分の曲線から復元した外径は13.6cmである。10は胴部の破片で、幅3cmの突帯を貼り付け、斜め方向の沈線を部分的に3本入れている。突帯部分の外径は、これも不確かな数字ではあるが、およそ30cmと推定できる。10のような幅広の突帯はあまり例がなく、本来の器形をイメージするのが困難である。広く類例を求めるに、北部九州の弥生時代後期末の甕棺に、よく似た幅広の扁平な突帯が用いられている。ただし9・10は甕棺にしては小さすぎ、地域的にもかけ離れているので、ここでは当該期の外來系の土器と推定するにとどめる。

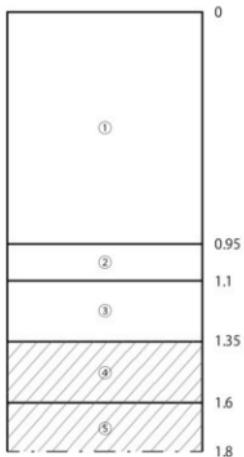
3 H16-3 地点 (旧2T)

服部モーター前の調査区で、H16-2地点の東側に位置する。現地表面から深さ1.8mまで掘り下げた。地表下0.95mまでは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層(①層)を含む。以下1.1mまでは旧表土層(②層)、1.35mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.6mまでは土壤化の強い暗褐色シルト質中砂層(④層)、1.8mまでは土壤化の強い灰色粗砂質シルト層(⑤層)となる。④・⑤層からは古墳時代の須恵器・土師器が出土したが、工事の掘削範囲内では、遺構検出面まで到達しなかった。

出土遺物には須恵器甕・土師器甕があるが、図化したものはない。



写真3-1 作業状況



第7図 H16-3地点北壁断面模式図 (1:20)



写真3-2 北壁断面

4 H16-4地点(旧7T)

ハイツアサヒ前の調査区である。現地表面から深さ20mまで掘り下げた。地表下0.8mまでは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層(①層)を含む。以下1.1mまでは旧表土層(②層)、1.25mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.45mまでは土壤化の強い褐灰色シルト質細砂層(④層)、1.75mまでは土壤化の強い暗灰褐色細砂質シルト層(⑤層)、1.9mまでは黄色土ブロックを含む濁灰褐色粗砂混じりシルト層(⑥層)、1.9m以下は淡褐色粗砂・礁粗砂層(⑦層)となる。⑦層は西に向かって高くなり、西端では地表下1.7mで現れる。④～⑥層からは古墳時代の須恵器・土師器が多数出土した。

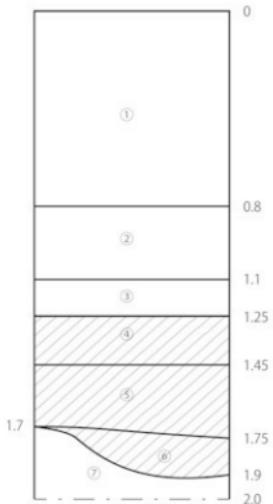
⑦層上面で、互いに切り合い関係をもつ柱穴3基(P1～P3)を検出した。P1は直径40cm、深さ20cm、P2は平面隅丸方形で1辺50cm、深さ30cm、P3は直径40cm、深さ20cmの掘り方である。

出土遺物には須恵器杯・甕・土師器高杯・甕・瓶があるが、図化したものはない。

5 H16-5地点(旧8T)

朝日ビル前の調査区である。現地表面から深さ1.75mまで掘り下げた。地表下0.85mまでは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層(①層)を含む。以下1.05mまでは旧表土層(②層)、1.2mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.35mまでは土壤化の強い暗灰色シルト層(④層)、1.45mまでは土壤化の強い暗灰褐色砂質シルト層(⑤層)、1.6mまでは黄色土ブロックを含む暗灰褐色シルト質細砂層(⑥層)、1.6m以下は褐色粗砂層(⑦層)となる。③層からは丹波焼の細片が、④～⑥層からは古墳時代の須恵器・土師器が多数出土した。

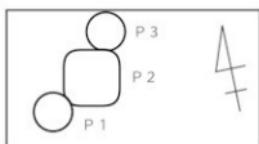
⑦層上面で溝1本(SD1)と柱穴4基を検出した。南北方向の溝SD1は幅60~70cm、深さ30cmで、埋土の暗灰褐色砂質シルト層(⑧層)から多量の須恵器・土師器の他、ウマの骨・歯(41-1~3)などが出土した。柱穴のうち2基(P1・P2)は、1辺50cmを超える隅丸方形の掘り方で、60cmの深さをもつ。断面観察によればSD1の掘り込み面は⑥層上面で、P2はSD1を切って掘り込まれている。



第8図 H16-4地点北壁断面模式図 (1:20)



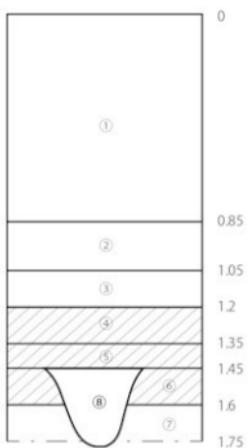
写真4-1 北壁断面



H16-4地点平面図 (1:50)



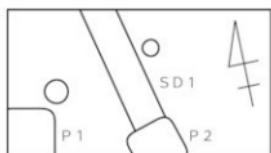
写真4-2 遺構検出状況 (東から)



第9図 H16-5地点北壁断面模式図 (1:20)



写真5-1 北壁断面



H16-5地点平面図 (1:50)



写真5-2 遺構検出状況 (南から)

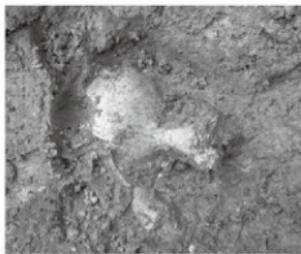


写真5-3 遺物出土状況



写真5-4 SD 1断面



写真 5-5 挖削状況



写真 5-6 精査状況

出土品の点数は 13箇所の中でもっとも多く、器種も多様である。出土遺物には丹波焼擂鉢・須恵器杯・甕、土師器高杯・壺・甕・製塙土器・イイダコ壺・土錘、弥生土器壺、砥石があり、16 点を図化・掲載した。16 点のうち、11～13・15・16・20・23・25 は S D 1、38 は粗砂層（③層）、それ以外は包含層（④～⑥層）からの出土である。

11～14 は須恵器杯蓋で、天井部の回転ヘラケズリは 2/3 程度に及ぶ。11 は口縁部が直立気味に屈曲し、天井部が高く弯曲する。口径 12.35cm、器高 4.9cm。12～14 は棱線が甘く、天井部は低い。口径 12.4～14.0cm、器高 3.6～4.05cm。15～17 は須恵器杯身で、受け部が内傾気味に短く立ち上がる。15 は底部外面を回転ヘラケズリで調整し、その上を自然釉が覆う。底面には格子状のヘラ記号が記される。口径 9.35cm、器高 3.7cm。16 は底部外面に回転ヘラキリの痕跡が残る。口径 11.2cm、器高 3.55cm。17 は底部外面を削らず、ナデのみで調整する。口径 9.6cm、器高 3.2cm。杯蓋と杯身の形態はやや時期差をもつものを含むが、全体としては 7 世紀前半におさまる。

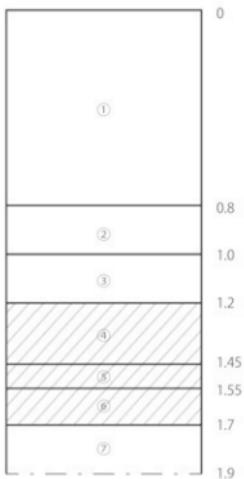
18 は須恵器壺で、短く外反する口縁部から、体部の上半部までが残る。外面は平行タタキをナデ消し、内面には同心円当て具痕が残る。口径 13.1cm。

19 は土師器椀で、内面には放射方向に暗文状のヘラミガキを施す。口径 10.3cm、器高 3.7cm。20 は土師器高杯で、浅い椀状の杯部に、ラッパ形の脚部がつく。外面と杯部内面は縱方向のヘラミガキで仕上げる。口径 15.85cm、器高 13.6cm、底径 10.6cm。

21 は製塙土器の口縁部の破片である。口径 9.0cm。22 は釣鐘型イイダコ壺の吊り手部の破片である。口径 15.85cm、器高 13.6cm、底径 10.6cm。23・24 は棒状の本体の両端に孔をもつ双孔土錘で、大きさに大小がある。断面が扁円形の 23 は、全長 6.7cm、幅 2.35cm、重量 35 g の完形品で、片側の端面に溝状の凹みをもつ。断面が円形の 24 は半折しており、現存長 6.1cm、最大幅 2.77cm、現存重量 33 g で、全長・重量とも 23 より大きいサイズとなる。

25 は直方形の砥石で、半折している。4 面に使用痕が残り、折れている中央部に向かって、研ぎ減りが著しい。小口面はあまり調整されておらず、素材の凹凸が残っている。きめの細かい砂岩質の石材を用いており、灰白色を呈する。現存長 5.78cm、幅 4.71 × 4.53cm、重量 139.2 g。

38 は丹波焼擂鉢で、細片のため写真のみ掲載している。内面のオロシメは浅く 1 本引きされ、間隔は 0.8～1.5cm で比較的広い。15 世紀後半～16 世紀前半の年代が与えられる。



第10図 H16-6地点北壁断面模式図 (1:20)



写真 6-1 北壁断面



H16-6地点平面図 (1:50)



写真 6-2 遺構検出状況 (東から)



写真 6-3 断面整形作業



写真 6-4 遺物検出作業

6 H16-6 地点 (旧5T)

安田ビルブックプラザ前の調査区である。現地表面から深さ1.9mまで掘り下げた。地表下0.8mまでは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層(①層)を含む。以下1.0mまでは旧表土層(②層)、1.2mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.45mまでは土壤化の強い暗灰色細砂質シルト層(④層)、1.55mまでは土壤化の強い灰色極細砂質シルト層(⑤層)、1.7mまでは土壤化の強い褐灰色細砂質シルト層(⑥層)、1.7m以下は黄褐色シルトブロック混じり細砂・細礫層(⑦層)となる。④層上半からは7~8世紀代の須恵器、④~⑥層からは古墳時代の須恵器・土師器が出土した。

⑦層上面で柱穴2基(P1・P2)を検出した。P1は直径40cm、深さ20cm、P2は直径40cm、深さ30cmの掘り方である。

出土遺物には須恵器杯・高杯・壺・土師器高杯・壺・瓶があり、4層上面から出土した1点を図化・掲載した。

26は須恵器杯蓋で、笠型を呈し、平坦な天井部には回転ヘラケズリを施す。頂部には扁平なつまみをもつ。口径15.0cm、器高3.8cm。時期は8世紀前半である。

7 H16-7 地点 (旧4T)

名田与三治商店前の調査区である。現地表面から深さ1.9mまで掘り下げた。地表下0.75mまでは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層(①層)を含む。以下0.9mまでは旧表土層(②層)、1.15mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.35mまでは土壤化の強い暗灰色シルト質細砂層(④層)、1.6mまでは土壤化の強い褐灰色細砂質シルト層(⑤層)、1.6m以下はしまりの良い黄褐色シルト質細砂層(⑥層)となる。さらに1.9m以下は灰色粗砂層(⑦層)となっている。④・⑤層には古墳時代の須恵器・土師器が多数含まれており、特に④・⑤層の境界付近では完形に近い土師器壺・壺が出土した。

⑥層上面で土坑2基(SK1・SK2)、柱穴3基を検出した。SK1は検出範囲内で径60×80cm、深さ30cm、SK2は径40×85cm、深さ30cmである。

出土遺物には須恵器壺・壺・土師器高杯・壺・壺、フイゴの羽口、弥生土器壺があり、地表下1.3mの④・⑤層の境界付近からまとめて出土した6点を図化・掲載した。

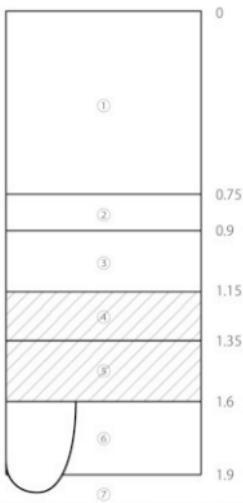
27~30は土師器高杯である。27は内弯気味に開く杯部の口縁のみが残る。口径21.1cm。28は有棱高杯の小型品で、水平な底面から口縁が外反気味に開く。口径14.5cm。29は楕状の杯部をもつ小型の高杯で、脚部の下半を欠失する。口径14.7cm。30はラッパ形に開く脚部である。底径10.6cm。

31は土師器直口壺で、全形を復元できる。扁球形の体部から直線的な口縁部が上外方に開く。外面はハケメで仕上げる。口径10.6cm、器高15.2cm。

32は土師器壺で、全形を復元できる。球形の体部から口縁部が短く開き、端部内面を肥厚させる。内面はケズリが強いためで薄く仕上げる。口径13.4cm、器高21.7cm。



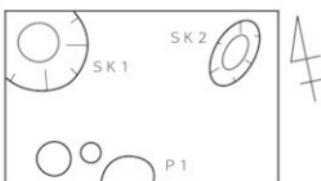
写真7-1 作業状況



第11図 H16-7地点北壁断面模式図 (1:20)



写真 7-2 北壁断面



H16-7地点平面図 (1:50)



写真 7-3 遺構検出状況 (北から)



写真 7-4 遺物出土状況

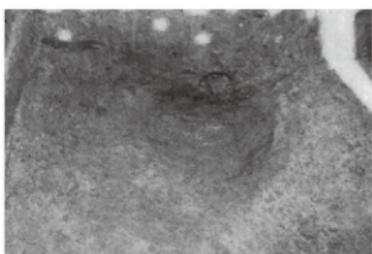
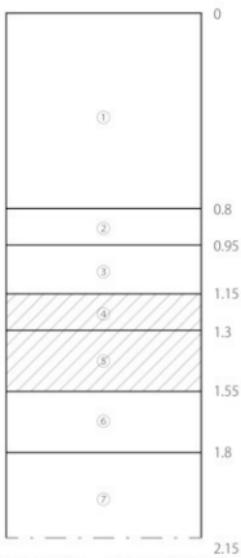


写真 7-5 S K 1 断面



第12図 H16-8地点北壁断面模式図 (1:20)



写真 8-1 北壁断面



写真 8-2 燃土 1 検出状況 (南西から)



H16-8地点平面図 (1:50)

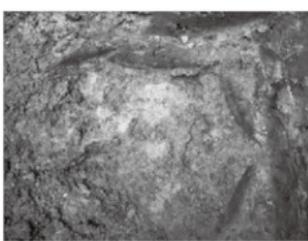


写真 8-3 燃土 2 検出状況 (南から)

8 H16－8 地点 (旧3T)

市道西334号線との交差点西側の調査区で、16年度の調査対象範囲のはば中央に位置する。現地表面から深さ2.15mまで掘り下げた。地表下0.8mまでは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層(①層)を含む。以下0.95mまでは旧表土層(②層)、1.15mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.3mまでは土壤化の強い暗灰色シルト質中砂層(④層)、1.55mまでは土壤化の強い暗灰色シルト層(⑤層)、1.8mまでは黄色土ブロック混じりの褐灰色砂質シルト層(⑥層)、1.8m以下は灰色粗砂～極粗砂層(⑦層)となる。④・⑤層からは古墳時代の須恵器・土師器が多数出土し、⑥層にも土師器片が含まれている。

⑤層上面(焼土1)と⑥層上面(焼土2)で焼土面を1箇所ずつ検出した。焼土1は径55cmほどの円形落ち込みの東側が熱を受けて、馬蹄形に赤変・硬化している。焼土2は径30cmほどの範囲に不定形な赤変・硬化面がある。

出土遺物には須恵器杯・高杯・甕・土師器高杯・壺・甕・製塙土器・カマドがあり、包含層(④・⑤層)から出土した4点を図化・掲載した。

33は須恵器杯蓋である。口縁部は直立し、端面は平坦である。天井部との境に突出した棱を設ける。天井部は回転ヘラケズリ後の回転ナデで念入りに再調整されており、当初の調整痕が残っていない。焼成は堅密で、全体に薄く仕上げられている。口径12.0cm。器高42.5cm。

34は土師器高杯で、脚部を欠失する。有棱高杯の杯部で口縁は大きく外反する。口径22.3cm。

35は土師器甕で、体部下半を欠失する。体部外面は継方向のハケメ、内面はヘラケズリで調整する。口径12.5cm。

39は土製カマドの裾部の破片で、細片のため写真のみ掲載している。裾部は直立し、端面は2cmの厚みをもつ。外面は粗いハケメ、内面は強いナデで調整する。復元径は50cm前後となる。

9 H16－9 地点 (旧13T)

市道西334号線との交差点東側の調査区である。現地表面から深さ1.6mまで掘り下げた。地表下1.0mまでは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層(①層)を含む。以下1.1mまでは旧表土層(②層)、1.4mまでは洪水性の粗砂層(③層)、1.45mまでは土壤化の強い暗褐色シルト質細砂層(④層)、1.6mまでは土壤化の強い暗灰色シルト質細砂層(⑤層)で、1.6m以下は黄灰色極細砂～細砂層(⑥層)となる。さらに1.9m以下は青灰色砂層(⑦層)となる。④・⑤層から古墳時代の須恵器・土師器が出土するが、遺物の包含量は比較的少ない。

⑥層上面で土坑1基(SK1)と柱穴6基を検出した。SK1はトレンチの東北隅に位置し、検出範囲内で、径70cm、深さ25cmである。柱穴はいずれも直径30cm、深さ10～40cmである。

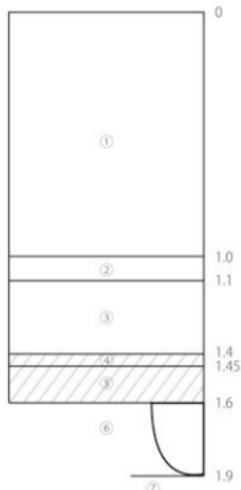
出土遺物には須恵器甕・土師器高杯・壺があるが、図化したものはない。



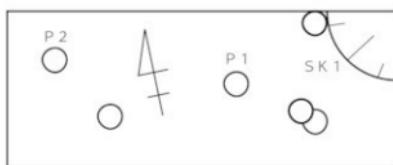
写真9-1 作業状況



写真 9-2 北壁断面



第13図 H16-9 地点北壁断面模式図 (1:20)



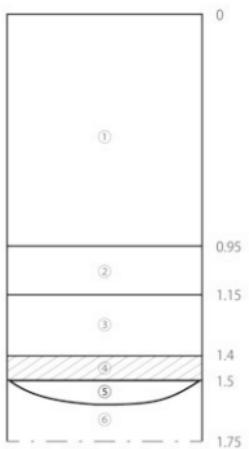
H16-9 地点平面図 (1:50)



写真 9-3 西半部遺構検出状況 (南から)



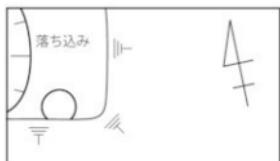
写真 9-4 東半部遺構検出状況 (西から)



第 14 図 H16-10 地点西壁断面模式図 (1 : 20)



写真 10-1 西壁断面



H16-10 地点平面図 (1 : 50)



写真 10-3 遺物出土状況



写真 10-2 遺構検出状況 (東から)

10 H16-10 地点（旧 12 T）

市道西 334 号線との交差点東側の調査区で、H16-9 地点の東側に位置する。現地表面から深さ 1.75m まで掘り下げるが全体に擾乱が大きく、西北隅の 1m 四方にのみ地層が残存していた。地表下 0.95m までは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層（①層）を含む。以下 1.15m までは旧表土層（②層）、1.4m までは洪水性の細砂～粗砂層（③層）、1.5m までは土壤化の強い暗灰色シルト質細砂層（④層）、1.5m 以下は灰白色細砂～中砂層（⑤層）となる。④層からは古墳時代の須恵器・土師器が出土した。

⑥層上面で落ち込み 1 简所と柱穴 1 基を検出した。落ち込みは調査区の西に向かって続いており、暗灰色シルト質細砂（⑤層）の埋土からは、炭片とともに土師器高杯・壺の大きな破片が出土している。

出土遺物には須恵器壺、土師器高杯・壺があり、落ち込みから出土した 2 点を図化・掲載した。

36 は土師器高杯で、脚部を欠失する。有後高杯の杯部で口縁は直線的に開く。口径 21.1cm。

37 は土師器壺で、口縁部を欠失する。体部外面は縱方向のハケメ、内面の下半はハケメ、上半はハケケズリが強いナデで調整する。腹径 25.6cm、現存の器高 25.3cm。

11 H16-11・12 地点（旧 11 T・10 T）

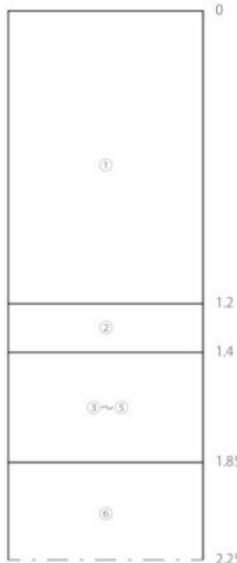
兵庫トヨタ前の調査区である。現地表面から深さ 1.95～2.25m まで掘り下げる。地表下 1.1～1.3m までは舗装・盛土層などの現代層と洪水性の砂礫層（①層）を含む。以下 1.3～1.4m までは旧表土層（②層）、1.85m までは洪水性の砂層（③～⑤層）、1.85m 以下は暗灰色シルト層（⑥層）となる。いずれの層においても、遺構・遺物は認められなかった。



写真 11-1 11 地点全景、北壁断面



写真 12-1 12 地点北壁断面



第 15 図 H16-11-12 地点北壁断面模式図 (1:20)

12 H16-13 地点 (旧1T)

市道西320号線との交差点西側の調査区で、16年度の調査対象範囲の中で最も東側に位置する。現地表面から深さ1.9mまで掘り下げた。地表下0.9mまでは舗装・盛土層などの現代層（①層）である。以下1.4mまでは洪水性の砂礫層（②層）、1.55mまでは旧表土とみられる土壤化した灰色シルト層（③層）、1.7mまではシルト混じり細砂層（④層）、1.7m以下は粗砂層（⑤層）となる。いずれの層においても、遺構・遺物は認められなかった。

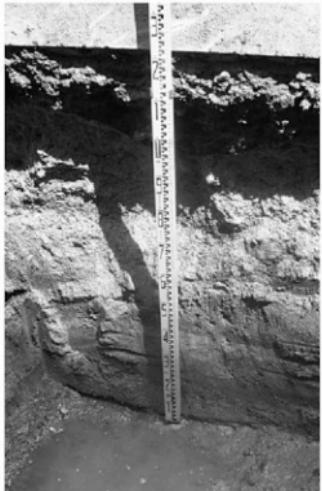
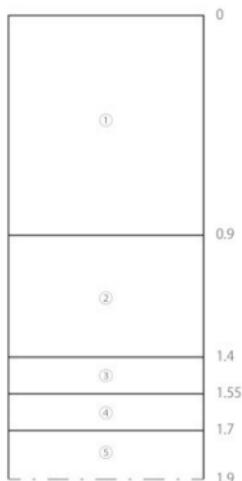
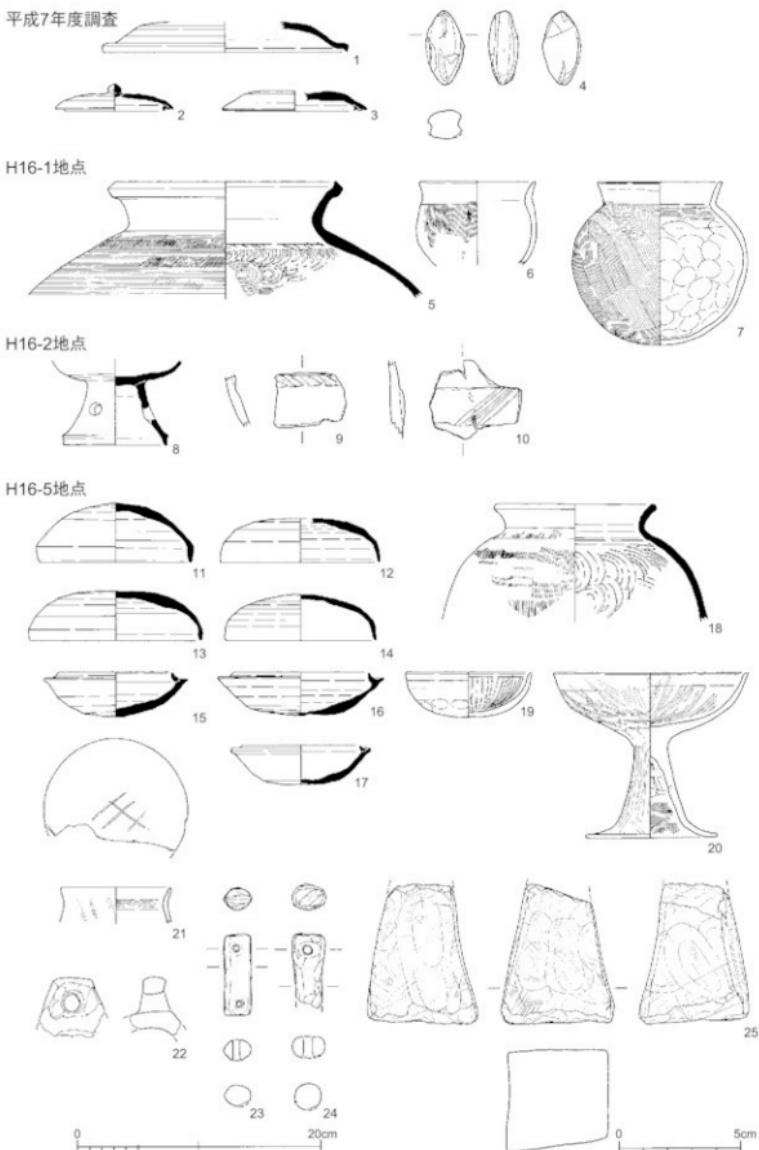


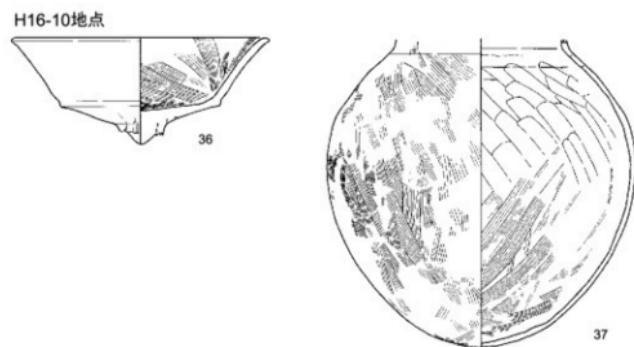
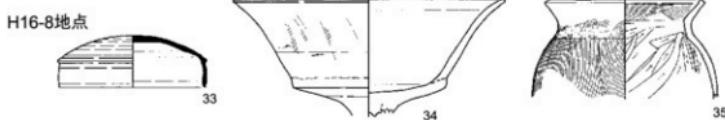
写真 13-1 北壁断面



第16図 H16-13地点北壁断面模式図 (1:20)



第17図 出土遺物実測図(1)



第18図 出土遺物実測図(2)

第4章　まとめ

1 基本的層位の観察

平成16年度の調査ではH16-1～13地点（以下、1～13地点と略す）において、制約条件の多い中ではあったが、はなはだ興味深い成果が得られた。地点ごとの断面図をつないで、調査範囲全体を概観したのが第19図である。この図の水準高は各地点の現地盤からの深さで表現しており、現地の標高差は反映されていないが^a、都市計画図によると1地点付近の地盤高は4.1m、8・9地点付近は4.0m、13地点付近は3.7mで、東西両端で約0.4mの比高差がある。

これによると各地点では旧表土層の上に50～90cmの厚みで盛土層があり、近代以降の市街化に伴うかさ上げがなされていることがわかる。さらに3～13地点には、盛土と旧表土の間に10～50cmの厚みで洪水性の砂礫層が堆積している。この周辺は昭和13年の阪神大水害でも被害が出たところで、この洪水砂もそうした明治～昭和初期の大きな水害の痕跡の1つとみられる。

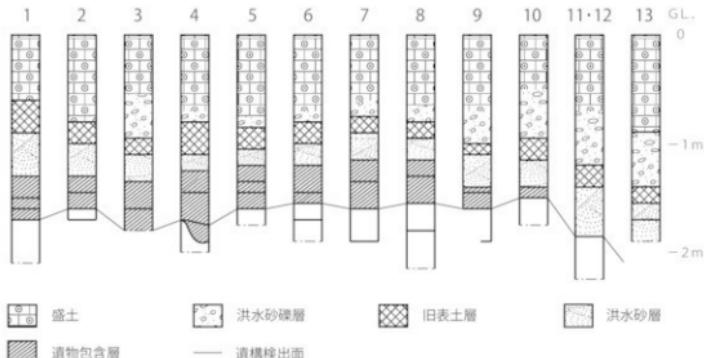
旧表土層の下にも各地点で15～45cmの洪水砂層が認められるが、5地点で出土した15世紀後半～16世紀前半の丹波焼の擂鉢片から、この災害は戦国期～近世に発生したものと限定できる。

遺構・遺物が出土した1～10地点の間には、洪水砂層の下に暗灰褐色シルトの土壤化層が広がっており、須恵器・土師器・弥生土器などの濃密な包含層となっている。この層自体も各地点で2～3層に分けられ、その途中の面から掘り込まれる遺構も存在するところから、2面～最大4面の遺構検出面の存在が予想できる。ただしどんどの遺構は、包含層を取り去った後の黄褐色～灰褐色シルト質砂層の上面を検出面としている。

1～10地点の遺構検出面のレベルは現地表面以下1.6m前後で、3地点がやや深くなる以外は大きな変動はなく、特に4～8地点にかけて、最も遺構・遺物が密集しており、集落域の中心に近い部分と考えられる。一方、東側の11地点付近では遺物包含層が消失し、遺構検出面も急に落ち込んで、13地点では現地表面以下2mを超えるものとみられる。11地点以東は、低湿地へ漸移する周辺域ととらえられる。

←西

東→



第19図 平成16年度調査区柱状断面図（縮1：40）

2 遺物について

出土した遺物はほとんどが土器で、弥生時代、古墳時代中期・後期、飛鳥時代、奈良時代の各時期にわたっている。

弥生土器は後期の壺・甕の細片が包含層に混入しているような状況で、明確なものはない。ただしH16-2地点の落ち込みから出土した土器の体部（9・10）には、前述したように、在地の製品に類例のない突帯があり注意を要する。北部九州の甕棺編年の最末期にあたるK V期（橋口1979）の資料に、よく似た幅広の扁平な突帯に文様を施す例があるという指摘（当センター篠宮正・深江英恵より教示を受けた）があるが、本例は細片で詳細な検討が困難であるため、後期末頃の外來系の土器であろうという評価にとどめておく。

古墳時代中期の土器は主に調査区東半の7～10地点から出土している。7地点の土器群は高杯・直口壺・甕からなる土師器のセットで、布留式の最も新しい形態を示す甕（32）の形態からみて、5世紀初頭にも遡りうる資料である。この地点からはまた、フイゴの羽口も出土している。8地点の須恵器杯蓋（33）は天井部外面を念入りに再調整してヘラケズリ痕を消しており、5世紀代には収まるものと思われる。

古墳時代後期の土器は主に調査区西端の1～2地点から出土している。須恵器高杯（8）・甕（5）などが該当するとみられるが、この時期の資料は断片的である。

飛鳥時代の土器は主に調査区西半の1～6地点から出土している。5地点のSD1出土品を中心とする土器群は、須恵器杯・甕・土師器碗・高杯・甕などに加えて、製塙土器・イイダコ壺・土錐といった生産具から構成され、他にウマの歯・骨も出土している。このセットは須恵器杯（11～17）の形態からみて、7世紀前半に収まる資料である。集落からの出土品に、こうした海の生産具を含むことは、例えば加古川市坂元遺跡〔兵庫県教委2006・2009〕のように、瀬戸内海沿岸の飛鳥時代の遺跡でしばしば認められることである。

奈良時代の土器はごくわずかではあるが、6地点で須恵器杯蓋（26）が出土している。

3 遺構について

古墳時代中期の遺物が主体となる7～10地点では、柱穴・土坑・焼土などを検出した。包含層中から出土する土器は全形を復元できる個体が多く、繰り返し攪乱を受ける状態ではなかったようである。あるいは住居跡が存在した可能性もある。8地点の2箇所の焼土は、⑤層上面と⑥層上面で検出しており、2面以上の遺構面の存在がうかがえるが、時期差は不明である。

飛鳥時代の遺物が主体となる1～6地点では、柱穴・土坑・溝などを検出した。1辺50cmの方形柱穴が見つかった4・5地点の調査成果から、遺構の状況について検討を加える。5地点の遺物包含層は④～⑥層の3層に分けられ、7世紀前半の土器が多数出土したSD1は⑥層上面から掘り込まれている。方形柱穴P2はこのSD1を切り込んでいて、後出るのは明らかである。さらにもう1つの方形柱穴P1はP2ともSD1とも異なる方向性を示している。また4地点で検出した柱穴はP3< P2< P1の順に切り合っていて、3つの段階が確認できる。4地点のP2と5地点のP1は形態・大きさと、現在の国道2号に沿う方向性が共通しており、同時期の可能性が強い。以上のことからこの時期には、大型掘立柱建物を含む建物群で構成された集落が、一定期間継続していたことが類推できる。

4 結語

今回は津門大箇町遺跡の北辺にあたる調査区で、古墳時代中期と飛鳥時代を中心に、弥生時代から奈良時代にかけての資料を得ることができた。部分的な調査のため、検出した遺構相互の関係などは不明であるが、遺構の密度からみて、かなり大規模な集落遺跡の存在が予想される。土層の状況をみると、東側については湿地状に変化してきており、集落域は一旦途切れるものと判断できる。しかしそれ以外は安定した遺物包含層がさらに広がる状況が認められる。平成18年度の調査区では過去に被った搅乱のため北側の状況を知ることはできなかったが、おそらく時代によって地点を遷しながら継続する拠点集落であったと評価できる。

中でも古墳時代中期については、かつて近辺に存在した津門福荷山古墳・大塚山古墳と併行する時代であり、2つの前方後円墳の造営母体となった集落の可能性が高い。その背景には、日本書紀に登場する「武庫（務古）水門」などで海上交通にたずさわった海人系氏族の存在が想定できよう。この海人は海での生産活動だけでなく、「王権に対して人的・物的な奉仕をしていた」存在であり、王権によって「国家的に編成」されていたとされる（坂江2012）。津門の地に築かれた2基の首長墳は、その裏付けと考えてよいのかもしれない。

古代になるとそうした集團は郷の単位に再編され、当地においては「津門郷」が成立していた。飛鳥時代の遺構・遺物は郷の実態を示す物証で、例えば8地点で出土した製塙土器や漁具は、海人としての性格を受け継いでいることを物語る。

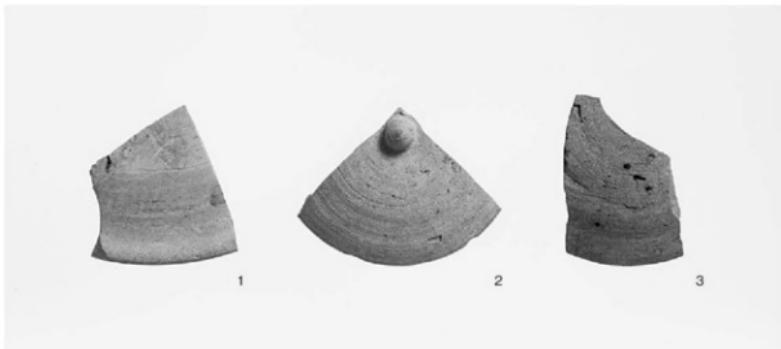
目的的調査ではあったが、非常に良好な資料が得られたため、地域の歴史の一断面を垣間見ることができた。遺跡が良い状態で遺存していることから、今後の調査によって、さらに詳細な内容が明らかとなることが期待できる。

参考文献

- 坂江涉2012『万葉集から読み解く風景』『神戸～尼崎　海辺の歴史　古代から近現代まで』神戸新聞総合出版センター
西宮市役所1962『西宮市史』第四巻 資料編I
橋口達也1979『斐宿の編年的研究』『九州縦貫自動車道関係歴文化財調査報告XXXII』中巻 福岡県教育委員会
兵庫県教育委員会2006『坂元道路Ⅰ』（兵庫県文化財調査報告第308号）
兵庫県教育委員会2009『坂元道路Ⅲ』（兵庫県文化財調査報告第366号）

写真図版

遺
物
(1)



写真図版 2

遺
物
(2)



8



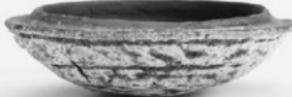
9



10



11



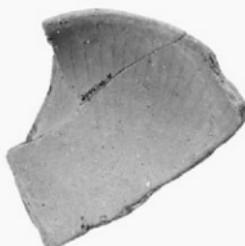
16



15



17



19



20

遺物(3)



18

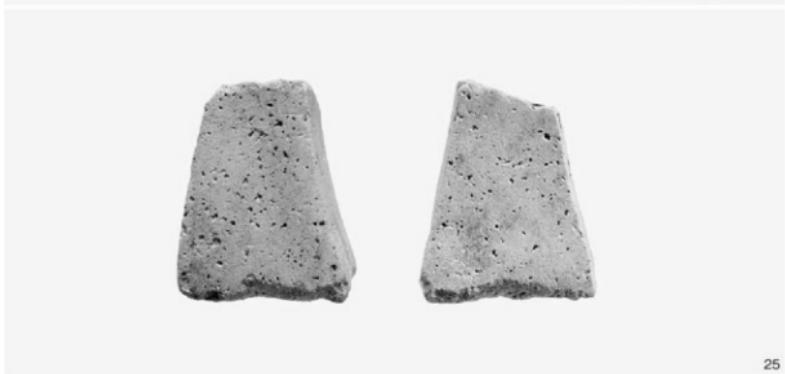


21

22

23

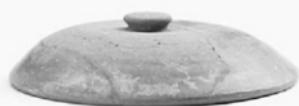
24



25

写真図版 4

遺
物
(4)



26



28



31



29



32



33



35



34

遺物(5)



36



38



37



39



40



41-1



41-2



41-3

報告書抄録

ふりがな	つとおおごちょういせき							
書名	津門大箇町遺跡							
副書名	2号電線共同溝事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第436冊							
編著者名	中川渉							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内） Tel.079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel.078-362-3784							
発行年月日	平成25（2013）年2月26日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 Tel.079-437-5589							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
津門大箇町遺跡	西宮市津門大箇町	28204	50092	34° 44' 10"	135° 21' 24"	20040901～ 20041203 (2004206) 20060606～ 20060614 (2006080)	169m ²	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
津門大箇町遺跡	集落	弥生時代		弥生土器		外來系（九州系？）の土器		
		古墳時代	柱穴・土坑・焼土	土師器・須恵器		フイゴ羽口		
		飛鳥時代	柱穴・土坑・溝	土師器・須恵器		製塙土器・土鍤、イイダコ壺、ウマの骨		
要約	津門大箇町遺跡の北辺にあたる調査区で、弥生時代から奈良時代にかけての資料が得られた。特に古墳時代中期と飛鳥時代の遺構は柱穴・土坑・溝などが高い密度で見つかり、かなり大規模な集落遺跡の存在が予想される。							

兵庫県文化財調査報告 第436冊

西宮市

津門大箇町遺跡

～2号電線共同溝事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

平成25（2013）年2月26日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
